

CLOSE-UP  
INTERVIEW

# 町田 樹さんに聞く

國學院大學人間開発学部健康体育学科助教、振付家、元プロフィギュアスケーター

「聞き手」 外川 智恵さん 大正大学表現学部准教授

積み重ねてきた実践知を武器に  
アーティスティックスポーツの  
可能性を広げていく

まちだ・たつき

1990年生まれ、神奈川県川崎市出身。関西大学文学部卒業後、早稲田大学大学院へ進学・博士後期課程修了。3歳からフィギュアスケートを始め、2014年ソチオリンピック5位入賞、2014年世界選手権2位という成績を残す。プロスケーターとして活躍した後、現在は、國學院大學で助教を務めるほか、振付家、フィギュアスケート解説者としても活動。

## フィギュアスケート界の問題を 解決すべく研究の道へ

**外川** 本日インタビューをさせていただくのは、かつてフィギュアスケーターとして数々の実績を残され、現在は國學院大學人間開発学部健康体育学科の助教として研究に取り組みられている町田樹先生です。フィギュアスケーター時代のエピソードから、研究の道に進まれた理由、そして現在のご研究まで幅広くお話を伺います。最初に、先生が研究対象とされている「アーティスティックスポーツ」について教えてくださいませんか。

**町田** フィギュアスケートや新体操、アーティスティックスイミングなど音楽を用いて踊る芸術的なスポーツを、私は「アーティスティックスポーツ」という言葉で括っています。従来、こうしたスポーツは芸術的な要素が強いためスポーツ科学の射程からこぼれ落ちていました。もちろん、芸術性を備えてはいますが、スポーツですので、芸術学の領域でも研究の俎上そじょうに載せられることはありませんでした。つまり、アーティスティックスポーツはアカデミアの領域において死角あひらいになってきたわけです。私は、そんな芸術とスポーツの間にあるような境界領域を研究対象としています。

**外川** 2つの研究領域が重なることで利点もあるでしょうが、難しさもありそうですね。

**町田** 2つ以上の学問領域を通して研究対象に迫ることを学際研究といいますが、私はまさにその手法をとっています。そのため、様々な研究手法を勉強して習得しなければならぬという大変さはあります。しかし、修士課程と博士課程を通して、スポーツ科学だけではなく芸術学も学び、アーティスティックスポーツに対してアカデミックに迫れるような下地は作ってきたつもりです。

**外川** そもそもアーティスティックスポーツを学問的に追究されようと思ったきっかけがおりだったのでしょうか。

**町田** フィギュアスケート界はとても華やかな世界に映るかもしれませんが、舞台裏を覗けば問題だらけなのです。例えば、経営難などの理由からスケートリンクが年々減少しており、練習できる場所が少なくなっています。実際に私が拠点としていたリンクも閉鎖されました。レベルの高い選手が育ち、経済効果を上げているスポーツにもかかわらず、それに反比例するかのように練習環境が悪化している実情があります。また、フィギュアスケートのみならず、採点競技は身体を見られるスポーツですので、女性の場合は特に摂食障

害という問題が起こりやすい。

私の周りでも、何人もの女性アスリートがそれでドロップアウトしています。現役時代から、こうした問題を放置しておくといふギニアスケート界の衰退につながるという危機感を持っており、

選手生活を全うした暁には、学術の力でこの問題を解決したいと考えていました。そこで、引退後に早稲田大学大学院に進学して、研究者を目指し始めたという経緯になります。

**外川** 私はマスメディア出身です。マスメディアでコメンテーター等のお仕事をされている町田先生は、例えばジャーナリズムによってフィギュアスケート界が抱えている問題を広く伝え、解決を図るという方法もあったと思います。様々な方法が考えられる中で、研究というアプローチを選ばれた理由をお聞かせいただけますか。

**町田** 私は、何かをクリエイトすること、そして表現することが大好きなのです。だからこそ、フィギュアスケートを続けてきました。アスリートのセカンドキャリアが問題になっていますが、競技生活が20年程度なのに対して、引退後のキャ



町田 樹さん

リアはともすれば一生続くことになります。そう思った時に、問題意識に突き動かされるだけでなく、自分の生きがいもそこに見出さないといけないと考えました。その点では、研究者という仕事はとても魅力的でした。研究を通して得た思想や知恵を論文という形で発表したり、講義という形で学生に伝えることができる。それは、クリエイトすることであり、表現することであると思うのです。その点で、研究者は、私の好きなことができる理想的な職業でした。

## 現場で培った実践知を生かして スポーツと学問をつなぐ

**外川** 理想が叶って、現在、研究者としてご活躍されているのですね。よく言われることですが、大学には研究と教育の両方が求められています。先生は研究活動に邁進されたいとお考えから研究の道に進まれましたが、教育活動とのバランスはどのようにとっちらっしゃいますか。

**町田** 自分の研究を鮮度の高い状態で学生に届けるということが、研究と教育を両立させる最良の方法だと思っています。教科書的な内容を杓子定規に教えるのではなく、私自身が研究を通して得た最先端の知識や味わった

知的興奮を学生にそのまま伝えることで、研究すること、探求すること、学問することは、こんなに面白いことなのだと感じてもらいたいですね。

**外川** 私もマスメディアから研究職に重心を移し、研究者として、よちよち歩きを始めたところですよ。現場で得た知見と研究活動を通じて得た知識の両方を持っているというのは、大きな強みだと感じています。

**町田** まさにその通りですね。とりわけスポーツ科学では、実践知がとて重要になってきます。良い研究は、良いリサーチクエスチョンを立てなければ始まりません。研究者にとって一番難しくて大事なことは、この「問いを立てる」という点だと思のですが、スポーツ科学の領域では実践知がないと良い問いが立てられないかもしれません。なぜならば、スポーツ科学は、スポーツの

実践現場が真に解決を願っている課題に取り組む学問領域だからです。ですから、実践経験や実践現場に関する深い知識や洞察力がどうしても必要になります。幸い、私は長年フィギュ



アスケート界にいましたので、そこで培った実践知を最大限に用いて、スポーツと学問をつなぐことができます。

**外川** 先生のなさっている研究は二次元的なものではなくて、実社会も加わった三次元的な取り組みだと思います。だからこそ多角的で深みがあるのかもしれないですね。

**町田** どの学問領域もそうですが、机上の空論では意味がありません。とりわけスポーツ科学は、研究によって得られた学識や知見が現場に還元されなければ存在意義がない学問だと思っています。そのため、研究成果を論文や講義、テレビ解説、こうしたインタビュー取材などを通して現場に還元するところまでをワンセットとして考えなければならぬと常々考えています。

## スケート人生を変えてくれた 大学での学び

**外川** ここからは、現役時代のお話もお聞かせいただきました。現在の研究につながる多くの知見をフィギュアスケートで培って来られたかと思いますが、まずはなぜフィギュアスケートを始められたのでしょうか。

**町田** 大したきっかけはないんです。実家の近くのスーパー

マーケットにスケートリンクが併設されていて、親と買  
い物に行った時にスケート選手たちが華麗に舞う姿を目に  
したんです。それで多分、私がやってみたくて言ったのでしょ  
うね。3歳頃からそのスケート教室に通わせてもらうこと  
になり、そのままずっと続けてきたという感じです。

**外川** そういうきっかけでフィギュアスケートを始めた方  
は多いと思いますが、多くの人はプロになることはできま  
せん。先生が長い間、競技を続けて自分を高めることがで  
きた理由はどこにあるのでしょうか。

**町田** 私がずっとスケートを続けられた理由はいくつかあ  
ります。大きな理由の一つは、私がとても人見知りでシャイ  
な性格だったことにあります。実は、学校で手を挙げるのも  
緊張してしまうくらい人前で何かを表現することが苦手で  
した。しかし、不思議なことに、スケートをしている時はそう  
いうことが全くなく、自分を素直に表現することができま  
した。自分を一番表現しやすい場所は、氷の上なのだと思っ  
ながらに感じていたんです。これが格好良い理由です。次に  
格好悪い理由の方もお話ししましょう。私は子供の頃、勉強  
がとても嫌いで、スケートに逃げ込んでいたんです。そうして  
スケートに熱中していくと、自分からスケートを引いたら何

も残らないのではないかとこの強迫観念にとらわれるようにな  
りました。「町田樹ーフィギュアスケート」0」という公式  
が自分の中にできてしまい続けざるを得なかったのです。高  
校までは、自分にはこれしかないのだからやるしかないとい  
う後ろ向きな気持ちでスケートを続けていましたね。

**外川** その後、前向きにフィギュアスケートに取り組むよう  
になられたんですね。ターニングポイントとなったのは？

**町田** 関西大学文学部に入学したことで価値観が大きく変  
わりました。私は勉強は嫌いでしたが、自分の興味関心があ  
ることを掘り下げて学ぶことは大好きでした。いつも宇宙や  
生物、あるいは文学や芸術など、多岐にわたる分野の本を持  
ち歩き、自分の好奇心を満たしていました。高校までと違っ  
て、大学はまさにそうした好奇心に基づいて学びを深められ  
る場所だったんです。必要な単位を取りさえすれば、あらゆる  
学部の授業を履修できるシステムでしたから、知的好奇心  
の赴くままに様々な学部の授業に出ていました。そういう知  
的な環境に身を置くことで、能動的かつ積極的に物事に取り  
組む姿勢が醸成されたんです。それから、フィギュアスケート  
にもようやく主体的に取り組むようになりました。今思え  
ば、大学は私の人生観や人間性を変えてくれた場所でした。

## 文武両道が生む相乗効果

**外川** 大学生活と競技生活の両立は大変ではありませんでしたか。どのようにしてバランスをとっていたのでしょうか。

**町田** 遠征などで大学に行けないことも多く、両立が難しい時期もありましたが、多少の無理をしながら文武両道を貫こうとしていました。そんな時、あることに気づきました。

私は、文武両道の「文」と「武」はそれぞれ独立しており、自分の能力が100だとしたら「文」と「武」に50対50で割り振って両立することが文武両道だと思っていました。そうすると、どちらも中途半端になってしまうので、本当はどちらかを犠牲にしなければいけないのではないかと。しかし、そうではなかったんです。不思議なことに、競技者として「武」に集中している時は、「文」の自分は休息している。一方、練習をして身体が疲れたり、次の競技会に不安を抱えたりしている時、大学で「文」に集中すれば「武」のストレスが解消される。そうしてメリハリが生まれることで、相乗効果のように「文」と「武」の両方が高まるのを実感したんです。文武両道は犠牲的に行うものではなく、相乗効果を生み出すものだったのです。私が受け持つ学生の多くがアスリートです

が、彼らにもこの経験をぜひ伝えていきたいと思っています。

**外川** 本当に深く共感できるお話です。研究と教育の両立に関しても、どちらかに偏るのではなく、研究で得た知識を学生に還元したり、逆に学生が持っている疑問を研究に生かしたりすることで相乗効果が生まれるように思います。

**町田** 私はずっと演じるということをしてきたからか、自分にはいくつもの顔があると思っています。研究者や教育者、振付家などの様々な顔があって、それらを時と場合に応じてスイッチングさせながら活動しているイメージです。ただし、むやみやたらにいろいろな活動をしているわけではありません。たとえば、研究の成果を振付家としての活動に生かしたり、あるいは、振付家として培ったノウハウを教育に応用するなど、それぞれの顔を相互に関連させてシナジー効果が生み出せるよう戦略的に活動しています。そういう意味で、自分を一つの枠組みだけに規定しないように心がけています。

**外川** その点では、先生は幼い頃からフィギュアスケーターとして注目を集めるといふ公的な顔も持っていらっしゃる。マスメディア時代に、私は注目を集める方々の苦痛を垣間見ることもありました。先生はご負担に感じることはありませんでしたか。

**町田** 見られることを苦痛に感じることはあまりなく、むしろありがたいと思ってきました。先ほどもお伝えしましたように、私はクリエイティブし、表現することが大好きなのです。表現とは誰かに伝えることですので、伝える相手がいないとそもそも成立しない。ですから、フィギュアスケートにおいても、研究においても、自分の表現が多くの方々に伝わって注目していただけることは、表現者としてこの上ない幸せだと感じています。

## アーティスティックスポーツが持つ多様性

**外川** 先ほど文武両道、研究と教育など、「両立」の話題が出ましたが、先生が研究されているアーティスティックスポーツも、アートとスポーツの両立を目指すものだと思います。実践知を積み重ねて来られた先生の観点から、どのような両立の形が理想的だと思われませんか。

**町田** 簡単に言えば、あらゆるスポーツは身体運動の技術を磨いて競うものです。一方、アートは表現行為です。「スポーツとアート」という括り方をするとなんだか相反するイメージになりますが、それを「技術と表現」と言い換えれば二項対立には見えません。なぜなら、表現するためには技術が必要だからです。高い技術力があればあるほど、豊かな表現

が可能になる。そう考えると、スポーツとアートの両立は可能なのです。しかし、うまく融合させるのはなかなか難しいですね。DJのターンテーブルのように、スポーツの盤とアートの盤の音をクロスフェーダーでうまく重ねてミックスさせるようなことができればいいのですが……。フィギュアスケートに限らず、アーティスティックスポーツ全般に言えることですが、どの業界にも色々な思想を持つ人がいます。フィギュアスケートはスポーツだと主張する人もいれば、芸術性の方を重んじる人もいるし、両方の調和を追求する人もいます。しかし、現実問題としてアーティスティックスポーツの競技のルールは一つしかありません。競技に対して異なる思想を持った人たちが一堂に会して勝負をしているわけです。私としては、これらのアーティスティックスポーツには、もっと多様性があったいのではないかと思っています。例えば、フィギュアスケートでも、バレエコンクールのように芸術性を高く評価する競技会があってもいいですし、芸術性を度外視してとにかくジャンプのテクニクを競う競技会があってもいい。そのように自分に合ったコンペティションに参加して、技術や表現を存分に発揮できるような世界になってもいいのではないかと思います。

**外川** 本当にそうですね。物事は画一的な物差しでは測れ

ませんよね。フィギュアスケートはその最たる例かもしれませんが。アナウンサーの仕事もそれに似ていて、実況する技術、ナレーションを読む技術、インタビューする技術、それぞれ全くの別物なんです。美しい日本語で正確に話せればいわけではない、必要とされる技術やシーンによって求められるものも、本人が目指すものも異なるので、どのアナウンサーが優れているというのは一概に言い切れないんです。

**町田** 私も試合の解説をする時に実況アナウンサーの方の仕事を目の当たりにしますが、やはりものすごい技術だと感心させられます。

## 研究者として、教育者として

**外川** 先生はアーティスティックスポーツの研究者としてどのような未来を描いていきたいと考えていらっしゃるのでしょうか。また、教育者として今後どのように学生を指導していきたいかお聞かせください。

**町田** アーティスティックスポーツはまだまだ大きな可能性を秘めていると考えています。芸術性をさらに開拓すれば演劇や舞踊のような舞台芸術に肩を並べられるような身体運動文化へと進歩できるかもしれませんし、スポーツとしても人間の

身体運動能力の可能性を開拓できるという魅力があります。その両義性を大切にしながら研究に取り組み、得られた知見を現場に還元することで双方を発展させることができれば理想的です。また、私自身、大学生活が人生の大きな転機になりましたので、学生の皆さんにも人生の宝物となるようなアカデミアの場を提供できる教育者でありたいと考えています。

**外川** プロフィギュアスケーターから研究者に転身された今、人生は充実していますか。

**町田** そうですね。私にとって研究は生きがいそのものから。いくらプライベートの時間が無かろうと苦に感じることは全くありません。本当に天職だったと思います。現在のようなキャリアを歩めたことに心から感謝しています。

**外川** この度はお忙しいところありがとうございます。

**町田** こちらこそありがとうございました。私のゼミにお招きして学生に講義をしていただきました。

**外川** それは大変光栄です。私のゼミにもぜひお越し願います。

